

西 道彦著『貿易取引の電子化』

(同文館 2003年3月刊)

立命館アジア太平洋大学教授
横山 研治 博士(経営学)

1 はじめに

電子商取引に関する研究は1980年の終わり頃に始まった。日本貿易学会の研究会でも、1990年当初から、数人の研究者が主要なテーマとして扱うようになった。1995年以降は、トレードタームズ研究とともに、電子商取引の研究は学会全体の中心テーマのひとつと考えられるようになった。たとえば、早稲田大学名誉教授の朝岡良平博士は、早い時期から、この分野の研究の必要性を主張し、教授の90年代の論文や研究発表の大半は、電子商取引の将来に関するものであった。現在は、貿易学会の研究会では、電子商取引に関して複数のパネルが用意されるようになった。

貿易取引という観点から電子商取引を観察すると、ふたつの側面が明確になる。ひとつは、商取引の当事者である売主と買主が、相互を探索し、引き続き取引交渉を行う媒体として、電子的手段を使用するという側面である。いわば契約締結への電子商取引の導入ということである。Businesses to ConsumersやBusinesses to Businessesという言葉で表される概念は、このような局面での電子商取引をさす。日本貿易学会以外の研究団体で行われている研究の多くはこの分野である。

もう一方の側面は、貿易取引の契約履行段階で、商品の移動やそれに対する決済に関連するものである。つまり、貿易取引の契約履行段階では、商業送り状、船荷証券、保険証券、外国為替などの書類が発行され、それらを輸

出地から輸入地へと、一般的には金融機関を経由して移動させ、物品に関する所有権の移動と代金決済を実現させる。これは、一般的には、荷為替決済といわれる方法であるが、この荷為替決済に必要な運送書類 (Transport Documents) を電子的メッセージに変換をして利用するということである。このような分野での電子商取引導入は、契約履行段階での電子商取引ということができる。日本貿易学会での電子商取引研究はこの領域が中心である。

それでは、貿易学会での研究がなぜ契約履行段階での電子商取引を中心にしているのかという理由にはふたつがある。ひとつには、貿易学会の創設以来の中心テーマが、貿易取引の商的流通に関するもので、具体的には契約条件としてのトレードタームズ研究ということからである。トレードタームズは、輸出入者間の所有権と危険の移転、物品の引渡し場所と方法の特定、費用の分岐点の特定などを行う機能を持つ。そのような研究対象が、電子メッセージの導入によりどのような変化を遂げるのか、必要な慣習的解釈や法的解釈はどのようなものであるかといったテーマは自然な流れであった。

第二には、貿易取引上のドキュメンテーションは、実務上、多くの費用と労力を必要とし、簡素な書類形式や書類作成の省力化は、コストカットの主要な方法と考えられていたためである。貿易コストの研究は十分研究が行われてきたとはいえない難い未開発の分野であるが、ことペーパーレスドキュメンテーションに関しては、貿易学会はかつて熱心に討議した歴史がある。貿易取引を簡素化する動きは、すなわち書類作りをどのように簡便に行い、その移動をいかに容易に行うかということと同義であった。

西彦彦氏の本著『貿易取引の電子化』は、貿易取引の中でも、決済に関連して使用される運送書類の船荷証券に的を絞ったものである。この理由について、氏は、はしがきの中で、貿易決済においては信用状を利用した方法が現在でも多く利用されていること、そして信用状決済はつまり荷為替決済であり、荷為替手形の中心書類は船荷証券であるということを述べている。さらに、船荷証券の使用価値を電子商取引が導入されても維持していく必要があるとも述べている。

2 本著の内容

第1章では、ヘグ・ルール、ヘグ・ヴィスピー・ルールおよびハンブルグ・ルールに基づいて、運送人の責任問題が論じられている。特に運送人の免責事由の問題について言及している。つまり、運送人の免責事由自体が、船荷証券統一条約に抵触するのではないかと主張している。

第2章では、運送人の責任制限その中でも特にパッケージ・リミテーションの問題が論じられている。実際、運送人が貨物の損傷や滅失に責任を負うとき、どの程度の責任を負うのかという問題を、損傷算定方法に言及しながら分析を加えている。

第3章は受取船荷証券の問題を考察している。輸送のコンテナ化とともに現れてきたこの問題を、その有効性、船積注記がなされた場合の効力、信用状決済との関係などをトピックスとして分析している。

第4章では船荷証券の危機について検証を加えている。具体的には、輸出地での補償状による故障付証券から無故障への書き換えの問題と、輸入地での保証渡しふたつの問題をテーマとしている。保証渡しの問題は船荷証券の電子化により解決できるのであるが、補償状の問題は、電子化されても残っていく問題として注意を喚起している。

第5章では、売主から買主への危険移転に関連して、2000年インコタームズのCIF契約を解説している。特にターミナル・ハンドリング・チャージの取扱いについて検討している。

これに基づいて、第6章では信用状取引における船荷証券の位置づけについて論じている。ここでは、まず船荷証券の重要性を再確認している。また、信用状統一規則が規定していない点について、電子記録の提示に関するe-UCPに言及している。

第7章では、船荷証券の危機を解決するひとつの方法としてスタンドバイ信用状について考察している。特に象徴的書類渡しが行われるCIF契約との関連で説明している。

第8章では、CIF 契約を前提として、海上運送状（Sea Waybill）と電子船荷証券を比較検討している。氏は、海上運送状が将来船荷証券に取って代わるということには否定的である。その性質からする、海上運送状は、将来、電子船荷証券に吸収されるべきであると主張する。

第9章では、船荷証券の電子化の問題を取り上げ、その道筋を分析している。特に、船荷証券に記載されている運送約款との関係、船荷証券の権利証券としての性質、電子データ転送における技術的問題、デジタル署名の問題、船荷証券の任意記載事項の問題、裏面約款電子化の問題など詳細な分析が行われている。

第10章では、船荷証券と電子船荷証券の有効性の問題に焦点を当てている。

最終章は、両船荷証券の所有権移転に関するいくつかの理論を検討している。それに基づき、船荷証券を電子化するには、権利を有価証券化する必要があると主張する。船荷証券にともなう権利と電子メッセージを結合させることにより、権利の流通を確保できるとする。

3 本書の評価

本書のタイトルからすると、各章の内容には違和感を覚える。しかし、英語タイトル、“Electronic Bill of Lading”（Electronic Bills of Lading のほうがより英語らしいのではないか）が表すとおり、内容は船荷証券を電子化するための分析となっている。ここではまず「電子船荷証券」という観点から本書の構成を検証してみる。

船荷証券の分析には、船荷証券の性質である「運送契約書としての性質」、「貨物引換証としての性質」、「権利証券としての性質」という3つの観点からのアプローチが必要である。本書の各章は、すべてがこの3つの観点に分類分けできるもので、船荷証券分析に必要な道具が過不足なく包含されている。以上の内容に、海上運送状の分析が船荷証券との比較という手法で加えられている。これは、船荷証券の電子化は、当然ではあるが船荷証券が将来

にわたり有効に使用され続けるという前提に立っているために、船荷証券の有効性を海上運送状との比較の上で裏打ちしようという目論見があるからであろう。この点についても、電子船荷証券という観点からは当然に必要な前提である。

本書の中心は第6章、第8章と続く第9章であろう。第6章と第8章でまず、船荷証券の海上運送状に対する優位性を詳細に論じている。実際は、学会でも議論が分かれるところである。貿易取引では伝統的トレードタームズの使用が中心であり、また荷為替信用状も幅広く使用されているという現実から、輸出入者のみならず銀行にとっても権利証券たる船荷証券の合理性がもっとも高い、というのが船荷証券を擁護する立場の意見である。一方、海上運送状の使用が増加するとする主張は、貿易取引の大半は連鎖性がなく権利証券は必ずしも必要でなく、また銀行も貨物への担保権設定は荷受人を当該銀行としていることで十分おこなうことができ、なにより「船荷証券の危機」の有効な解決方法である、とする。先に述べたように、氏は船荷証券の権利証券としての性質が売買当事者および銀行にとっても有効であるとする。氏の論点はひとつの観点として完成度が高く、ひとつの見識として評価できる。実際、現段階、どちらに軍配をあげるかは困難な選択である。このような船荷証券が将来にわたり有効である、あるいは有効であるべきという前提に立ち、第9章では、電子船荷証券実現のための問題提起と詳細な分析を行っている。本書の大団円といえる章である。

本書は、船荷証券に関する本格的な研究書ということができる。船荷証券に関する研究書の刊行は、近年ほとんど見ることができない。ごく限られた分野の研究を除けば、船荷証券研究はすでに高い完成度を持っており、論文で補足することはあっても、一冊のオリジナリティのある著作は無理ではないかという見方があるのも事実である。しかし、本著はそのような考え方を覆し、従来の研究に基づき、さらに近年の動向を踏まえ、書類の電子化という将来への提言の書となっている。ここに本書の独創性を感じるとともに、著者の心意気や高邁な志さえも伝わってくるのである。